

二〇二二年度大学院博士後期課程入学試験問題

研究科名	文学研究科 人文学専攻
科目名	専修共通問題 (No. 1)
	日本文学・日本語学専修

【問題】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、それぞれの解答の最初に、「問一」、「問二」などと明記すること。

日本近代文学確立期の幕あけが、島崎藤村の「A」(明39・3)によってなされたとする文学史的定説もゆえなしとしない。ひたすら自分をかくすことに腐心して、「持つて生まれた、自然の性質を消耗^{すりへら}して居た」と気づいた瀬川丑松は、みずからを欺く虚偽の生活を脱し秘密を告白する。それは――、「社会の人に自分の素性を暴露^{さらけだ}さうなぞとは、今日迄思ひもよらなかつた思想^{かんがへ}なのである」。過去の自分を葬り、旧習と偏見の前に生まれ変わったおのれを打ち出していこうとするこの思想を、丑松の「A」に造形化することによって、まさに藤村は、時代を画する作品を残すことになった。そこに、「社会的偏見に対する抗議と、自意識上の相克」を読み取ったのは平野謙だが、他方、「藤村は、いかにも巧妙に丑松に扮装した」として、藤村個人の感情解放の内面的な問題を散文文化した大がかりな「心境小説¹とも身边小説とも云ふべきもの」とする佐藤春夫の見方があり、やがて、「告白」にこそ、重点があるのだとする和田謹吾の見解が導かれている。和田は、「蒲団」と抱き合わせるまでもなく「A」は、「B」の文学として「私小説的な方向へと流れていく自然主義文学の第一作」、たる地位を占めるものと認めるわけだが、それは、近代文学確立期における「私」の位相を剔抉したものととして注目される。

「私小説」と言う小説形式は、日本近代文学史に大きな影を落としている。近代文学²に現れた「私」という問題を考える時、したがってそれが、重要な対象として浮かび上がってくることはもちろんだが、この課題の究明がそこに限定されるものではないことも言うまでもない。「A」や「蒲団」が提起した問題はそれとして、これら確立期の動きに先んじて、二〇年はやく日本近代文学はスタートしている。屈曲した近代の歩みとともに、そこに浮き沈みする「私」の相貌も一樣ではない。

近代小説は、自覚的な作家主体をかけた意識的行為の所産である。文学の独立を主張した「小説神髓」(明18〜19)に呼応するかのごとき硯友社グループの登場は、文学プロパーの徒の初の出現を思わせたのだが、しかし³がれらには、まだその文学を主体をかけて担う自覚がなかった。

苦悩する近代の姿を、二葉亭四迷は、内海文三という官僚機構から阻害されていく余計者の存在を造型することによってとらえた。目覚めた文三の自我葛藤の苦しみは、求心的な傾斜を深める第一編⁴から第三編への変化に顕著であり、しかも、その中絶が物語るように、それは作家二葉亭、その人の苦悩に裏打ちされていた。目覚めた作者と作中人物の個性、あるいはその個性がたどる運命との内面的なつながりを得て、日本文学ははじめて、近代への道に立ったわけだが、したがって同時にそこには、近代文学に現れた「私」の注目すべき原型が浮き彫りにされていた。

インペリアリズムからソシアリズムへと、二葉亭の思想形成は屈曲している。儒教や西洋哲学の感化が介在して、かれの内「正直」の観念が形づくられる。自己を知り、みずからきびしく律しつつ、「俯仰天地に愧ぢざる」、おのれを生きる(「予が半生の懺悔」)。時代社会への眼を深め、内在する矛盾を止揚しつつ自己の存在をかけた作家主体が、近代の「私」が、育まれていく。錯雑する内面をあとづけ、ここに「やや妙なかたち」ながら統合点を見る稲垣達郎が、それをほぼ「浮雲」の時代のことと推定している。作家主体と作品とのかかわりがここでも思われるわけだが、さらに注目すべきは、この自己にきびしい「正直」のいとなみが、正しい意味での自己のひろがり限定する傾向を持っていたという稲垣の指摘である。「外へすばまり、内へふかまろうとしたうごき」を見抜いたその慧眼は、日本近代文学における「私」の相を、きわめて示唆的に透視している。

(榎本隆司「近代文学にあらわれた「私」より。 出題の都合で本文を改めた個所がある。)

出典 三好行雄・竹盛天雄 編

『近代文学 10 文学研究の主題と方法 (有斐閣双書)』 (昭和五十二年十一月、有斐閣)

二〇二三年度大学院博士後期課程入学試験問題

研究科名	文学研究科 人文学専攻 日本文学日本語学専修
科目名	専修共通問題 (No. 2)

問一、文中の空欄Aに入る作品名を漢字で書きなさい。

問二、文中の空欄Bに入る語句を、漢字四文字で書きなさい。

問三、文中の――部1の「心境小説」について説明しなさい。

問四、文中の――部2の「近代文学に現れた「私」という問題」とはどのようなものであったのか。〈前近代〉との比較を含めて説明しなさい。

問五、文中の――部3について、なぜ「硯友社グループ」は、「まだその文学を主体をかけて担う自覚がなかった」と言えるのか。その理由を説明しなさい。

問六、文中の――部4の、「浮雲」第一編から第三編への変化」について説明しなさい。

問七、本文でも触れられていた「自然主義と私小説」について、それぞれの特徴と両者の違いについて述べなさい。